社会福祉法人 水仙福祉会　会報　かぜのわ

風の輪

平成18年8月11日発行
第30号
社会福祉法人　水仙福祉会
〒533-0044 東淀川区小松１丁目14-12
Tel 06-6328-3786　Fax 06-6328-3833

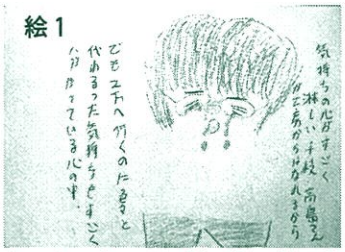
題字　岡村　重夫

「さびしい」から「おこってる」へ
アートセラピーの現場から

古堅先生は、絵画を使ったアートセラピーを法人各施設で実践されています。障害をもつ人にとって真の自立とは何かについて、ワークセンター豊新での実例から語っていただきました。

涙の自画像

アートセラピーの時間…、Tさんが後姿にもありありとわかるような打ちひしがれた様子で一生懸命絵を描いています。職員の一人が「私が異動になったことを今朝みんなに伝えたので…」とそっと耳打ちしてくれました。異動といっても建物の1階から2階に変わるだけなのですが、毎日自分のことを理解して受け止めてもらいながら一緒に仕事をしてきた人たちにとっては大事件に違いありません。画用紙には涙を流して泣いている自画像、その横には「気持ちの心がすごくさびしい…」と綿々と綴った言葉も添えられています＝絵1。「もう1枚描いてみる？」と声をかけてみました。絵は枚数を重ねて描いていくことで自分の心の深みに下りていくことができるのです。



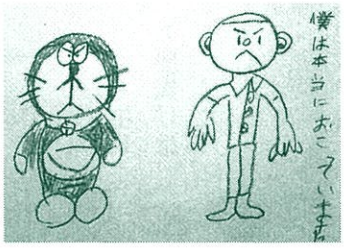
絵1

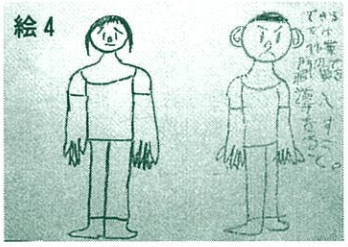
絵2

そしてTさんの2枚目の絵はやはり自画像でしたが、今度は胸の前で指を組んで、口を真一文字に結んで、眼はしっかり正面をにらみつけています。横に添えられた言葉は「おこってる」…＝絵2。「誰に怒ってるの？」と思わず尋ねると「こういうことを決めた人！」「それって誰のこと？」「園長先生！」…。

障害者の自立

この日は、Sさんも「僕は本当におこっています。」という絵を描いていて＝絵3・4、こうなったら二人で園長先生に話を聞いてもらおう、ということになりました。先生の前に座った二人は、自分たちの思いを言葉にし、抗議しました。話を聞いてもらい、異動の事情の説明を受け、「これから、もっとみんなに相談してから決めますね」と回答をもらった二人は、そこでやっと緊張の糸がゆるんで、ごく自然の流れで抱き合って泣いた…という展開になりました。どれほどはりつめた思いだったことでしょう。




絵4

絵の時間にこういう予行演習をしながら、現実に向います。障害者自立支援法は、福祉現場に様々な波紋を呼んでいます。法制度の変化によって激変する生活の中、「素直でまじめで誰からもかわいがられる」「いわれた通り頑張って仕事をする」という障害者像でなく、自分の気持ち、自分の考えに自信を持ち、それを相手に伝える力を持つことが本当の意味での障害者の自立ではないかと気づかされた出来事でもありました。

古堅真紀子
（アートセラピスト）